

# 東シナ海開戦3

パンデミック

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

## 目次

プロローグ	11
第一章 脱出	19
第二章 苦い勝利	39
第三章 対潜作戦	63
第四章 応援部隊	91
第五章 生還	118
第六章 強奪	144
第七章 一隻の波紋	169
第八章 パンデミック	191
エピローグ	202

# 登場人物紹介

## 日本

### 〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい  
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

### 〔原田小隊〕

はらたたくみ  
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき  
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん  
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ  
大城雅彦 一曹。土門の片腕としての活躍。コードネーム：キャッスル。

まさだ はるお  
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた  
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ  
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き  
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

### 〔姜小隊〕

かんあやか  
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をつけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしげらたけとみ  
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん  
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける  
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

みずの ともお  
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

にしかわしんすけ  
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

み どうぞう ま  
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこう じ きわあつ  
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の巨頭。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさみ  
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ  
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしょう  
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら  
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま  
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

#### 〔訓練小隊〕

あまひひろし  
甘利宏 一曹。元は海自のメデイック。生徒隊時代の原田の同期。訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

#### 〔民間軍事会社〕

おとなしせいじ  
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。〆ヘブン・オン・アース。内に滞在していた。

#### 〔西部方面普通科連隊〕

し び ひかる  
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせるため、台湾にいたが……。

#### 〈海上自衛隊〉

さきまさあき  
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信頼醸成措置会議の、日本側代表団を率いる。

かわはた ゆ たか  
河畑由孝 海将補。第一航空群司令。

しもぎのしげ き  
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

い せ ぎまたもつ  
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

#### （第一潜水隊群）

ながもりともゆき  
永守智之 一佐。第一潜水隊群司令。

うぶかたて お  
生方盾雄 二佐。〆おうりゅう、艦長。

しんどうあら た  
新藤荒太 三佐。〆おうりゅう、副長兼航海長。

むらにしこう じ  
村西浩治 曹長。航海科。作戦の全般を監督する。原田拓海とは同期で、生徒隊繋がり。

## 〈外務省〉

九条寛くじょうひろし 外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。`ヘブン・オン・アース、日本側の事務方トップ。

〔豪華客船 `ヘブン・オン・アース、〕

マッティオ・カッサーニ 船長。イタリア人。

ガリーナ・カサロヴァ `ヘブン・オン・アース、の船医。五ヶ国語を喋るブルガリア人女性。

五藤彬ごとうあきら `ヘブン・オン・アース、の船医。感染症学が専門の研究者。

是枝飛雄馬これえだひゅうま プロオケを目指していた青年。プロオケの先輩から誘われ、`ヘブン・オン・アース、に乗り込んだ。

浪川恵美子なみかわ えみこ 是枝が思いを寄せるピオラ奏者。音楽教師を三年で辞めて、奏者に復帰した。

ハリムラット・アユップ `ヘブン・オン・アース、の中庭のワゴンでケバブを売っていた男。

## /// アメリカ ///

### 〈陸軍〉

マーカス・グッドウィン 中佐。グリーンベレーのオブザーバー。

### 〈海軍〉

クリストファー・バード 元海軍少将。太平洋相互協力信頼醸成措置C C I C P会議のアメリカ側代表団。佐伯昌明元海上幕僚長のカウンターパート。

### 〈海兵隊〉

ジョージ・オブライエン 中佐。海兵隊オブザーバー。

### 〈ネイビーシールズ〉

カイル・コートニー 曹長。チーム1のベテラン。

エンリケ・リマ 大尉。部隊の指揮をとる。

## /// 中国 ///

### 〈中南海〉

潘宏大パンホンダ 中央弁公庁副主任。

### 〈国内安全保衛局〉

秦卓凡チンチャオファン 二級警督（警部）。

スウユエ 蘇躍 シユウエンロン 警視。許文龍が原因でウルムチ支局に左遷されたと思っていた。

## 〈海軍〉

### (総参謀部)

レン ス ユアン 任思遠 海軍少将。人民解放軍総参謀部作戰部特殊作戰局局長兼特殊戦司令官。四一四突撃隊を立ち上げた。

ホアントン 黄桐 大佐。局次長。

### (四一四突撃隊)

ゴンフイホン 公衛紅 海軍大佐。突撃隊隊長。

トロンイーチ 鄧一智 中尉。副官。

タオカンティアン 陶剛強 中佐。襲撃部隊副隊長。

モオユウキン 莫裕堅 少佐。機関室襲撃のリーダー。

シユイヤン 徐陽 曹長。

### (`蛟竜突撃隊)

シユイセントン 徐孫童 中佐。`蛟竜突撃隊、を指揮する。

トンシアオニン 東曉寧 海軍大将 (上将)。南海艦隊司令官。

ホワイチ 賀一智 海軍少将。艦隊参謀長。

### (K J - 600 (空警 - 600))

ハオフイ 浩菲 中佐。空警 - 600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

イエフワン 葉凡 海軍少佐。空警 - 600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チンイー 秦怡 大尉。副操縦士。上海の名門工科大学、同済大学の浩菲の後輩。電子工学の修士号をもつ。

カオシユエビン 高学兵 中尉。機付き長。浩が関わるずっと前から機体開発に関わっていたベテランエンジニア。

### (第 164 海軍陸戦兵旅団)

ヤオイエン 姚彦 少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン 万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン 雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を立てさせると有能。

タイイーチ  
戴一智 少佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体になり旅団情報参謀に任命された。

### (台湾)

ライシャオチエオ  
頼筱喬 ロンメン サクラ連隊を率いて戦死した頼龍雲陸軍中將の一人娘。台北で新規オープンした飲茶屋の店主。司馬光が「チャオ」と呼び、店の開店を支援している。

ワンチーハオ  
王志豪 退役海軍中將。海兵隊の元司令官で、未だに強い影響力をもつ。王文雄の遠縁。

ワンウェンション  
王文雄 司馬の知り合いで、司馬は「フミオ」と呼ぶ。京都大学法学部、大学院に進み、国民党の党職員になった。今は、台日親善協会の幹部候補生兼党の対外宣伝部次長。

### (台湾軍海兵隊)

#### [第99旅団]

チェンヂーウェイ  
陳智偉 大佐。台湾軍海兵隊第99旅団の一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン  
黄俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長でもある。

ウージンフー  
吳金福 少佐。情報参謀。

ヤンヂーミン  
楊志明 二等兵。美大を休学して軍に入った。

### (空軍)

リーイェン  
李彦 空軍少將。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

リウジェンホン  
劉建宏 空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。

## /// シンガポール ///

### 〈インターポール・反テロ調整室〉

シウウェンロン  
許文龍 警視正。RTCN代表統括官。

メアリー・キスリング RTCNの次長。FBIから派遣された黒人女性。

しばたゆきお  
柴田幸男 警視正。警察庁から派遣されている。

パクボムホ  
朴机浩 警視。韓国警察から派遣されている。

## /// イギリス ///

### 〈英国対外秘密情報部 (MI6)〉

マリア・ジョンソン MI6極東統括官。大君主。オーバーロード



東シナ海開戦3

パンデミック



## プロローグ

陸上自衛隊特殊作戦群・第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実特殊部隊、サイレント・コア、かん姜小隊の分隊長、フィッシュコみずのともおこと水野智雄一曹は、いささか難しい立場に置かれていた。率直なところ、これはどう考えてもドツボにはまっただけで、何とか思えなかった。

水野は同僚のトッピーことにしかわしんすけ西川新介二曹と、南シナ海のと真ん中に置き去りにされていたのだ。

背後には人民解放軍が占領した東沙諸島の東沙島があるが、もちろん島に戻るわけにはいかない。そしてこの島は、中国海軍の大艦隊に包囲されている。沖合を解放軍の偽装漁船がぐるりと囲み、

投光器で島の海岸線を照らしていた。水平線には、大小様々な軍艦も浮かぶ。味方は、もういなかった。

しばらくは解放軍のゾディアック艇が走り回っていたが、潜水艦が去ったことに気づくと引き返していった。

ここにいるのは米海軍ネイビー・シールズのコマンド二人と、東沙島から脱出途中にはぐれた台湾軍海兵隊員五人。うち二人は疲労でかなり弱っている。そして捜索に加わった海兵隊員二人の、計一人の兵士だ。

予定としては、二個中隊の兵士を海上自衛隊と

台湾海軍二隻の潜水艦に収容し脱出するはずだった。作戦名は、キスカだ。

だがスコールの夜に島を脱出したせいで、落伍者が出てしまった。それを探しているうちに、解放軍が脱出作戦に気づいたらしい。味方潜水艦は水野らを洋上に置き去りにして潜航、脱出するしかなかったのだ。

現在、水野らは円陣を組んで洋上を漂っていた。まずは疲労困憊の海兵隊隊員の回復を促す必要がある。浮力ベストを着せたので、もう溺れる心配は無いが体力を回復させるためネイビー・シールズ・チーム1のベテラン曹長カイル・コートニーが、自分のハイドレーション・パックからシールズ専用の高カロリーなエナジー・ドリンクを飲ませてやった。

時折、哨戒ヘリが頭上を通過するため、そのたびシヌノーケルで水面下に潜らなければならな

ったが、この辺りの海水温はそれなりに高い。赤外線イメージで覗かれても、溺者がはつきり映るということはまずないはずだ。

自分たちの周囲は真っ暗だが、洋上には灯りがあった。東沙島の解放軍占領エリアでは投光器が煌々と点っているし、偽装漁船の投光器の灯りもある。

円陣を組む兵士の互いの表情は、辛うじて確認することができた。コートニーたちに従い、迷った兵士の捜索に参加していた二人の台湾軍兵士が仲間を励ましている。

彼らは見上げた兵士だと、水野は思った。そのまま潜水艦で脱出することもできたのに、捜索に参加したことで取り残される羽目になったのだ。

中国海軍は彼らが乗ってきた潜水艦を狩ろうとしていたが、それについては、水野はさほど心配はしていない。

台湾海軍の潜水艦はともかく、海自の潜水艦はそう易々と中国軍にやられはしないだろう。

自分たちの方こそ問題山積みだ。少なくとも、半径一五〇キロから二〇〇キロ圏内は中国海軍が支配し、その上空も当然中国軍が制空権を確保している。この辺りは余りにも浅く、もはや味方潜水艦をおいそれと呼べるような場所でもない。

そして、夜明けが近づいていた。一人二人ならともかく、この人数で漂流していれば、早いうちに気づかれる。

取れる手も多くない。再度島に戻り、島に残った負傷兵らと行動を共にし、明るくなってから人民解放軍に投降するか、ネイビー・シールズのBプランに乗るかの二択だけ。

更にこのBプランとやらは、どう考えても無茶な内容だった。一言でいえば、糞くそみたいな作戦だ。

「曹長、あなたは中国の偽装漁船の構造をご存じ

なんですか」

「よく知っているよ。というか、われわれは何隻か持っている。某国で拿捕だほされた偽装漁船を密かに買い取り、中国沿岸部での極秘作戦に使っている。だから、どこから登れるかとか、船内の構造も良く理解しているつもりだ」

「では、本当に可能なんですね」

「フィッシュ、俺や君がこれまでにこなしてきた数々の無茶な作戦に比べれば、どうってことないものだぞ。ベテランのコマンドが四人もいるんだ。乗っ取ること自体は朝飯前だろう。問題はその後だが、それは船上で考えよう」

コートニー曹長とは何度も一緒に訓練していた。彼に従う部下のトニー・ブルーベック軍曹とは初対面だが、曹長自ら選抜したはずだから、その技量を疑う理由はない。

水野は、捜索に加わった台湾軍海兵隊の劉金龍リウジンロン

伍長の元まで泳ぐ。

「ミスター。私は自衛隊の水野一曹だ。フィッシュと呼んでくれ。君たちの勇氣には、脱帽するよ。あのまま潜水艦に乗っていてもかまわなかったのに」

呼びかけられた劉金龍伍長は、いきなり北京語で話しかけられたことに驚いたようだ。ウエックト・スーツから僅かに覗く顔面にも迷彩ドローンを塗っているせいで、お互い表情すら見えないが、流ちょうな北京語が聞こえてきたことに台湾人は明らかに驚いていた。

「ひょっとして、中国系日本人ですか？」

「いや、日本人だ。北京語は、中華料理屋の女将おかみにみっちり仕込まれた。それより、あなたのことは何と呼べばいい？」

「自分は、劉金龍伍長ですが、ドラゴンと呼んでください。部隊でもそれで通っている。そ

して部下、というわけではありませんが楊志明サンヂンミン二等兵です。美大中退の、アーティストです」

「すみません、伍長。中退ではなく、あくまでも休学です」

ふたりのやりとりにも、水野は声を出して笑って見せた。

「元気で結構！ ではドラゴンにアーティスト。ネイビー・シールズがナイスな作戦をもっている。なんと、沖合の偽装漁船を乗っ取るそうだ」

「……マジっすか？」

二等兵が呻いた。

「本当だ。彼らは、偽装漁船の構造も知り尽くしているそうだが、うまくいくと思うかい？」

「どの道、作戦はそれしかないでしょう。それに、ここに現れた偽装漁船のことなら、自分らだって詳しいです。自分はずっと斥候班を率いて、海岸線から二四時間奴らを見張っていました。乗員の

交替の時間、飯の時間も把握していません。この時間帯ブリッジにいるのは、多くても三、四人でしょう。デッキ上に見張りはいないし、登ってしまえばこっちのものだ」

「乗組員は何人くらいいるんだ」

「一〇人前後です。彼らの仕事はただ、われわれを見張りながら、夜に投光器を島に向けるだけです。上陸二日目の夜は、一晚中乗組員が出てきて投光器がきちんと向けられているか操作していましたが、今夜はご覧の通りです」

確かに、投光器の光は漁船の横揺れに従い波に揺れている。オート・スタビライザーや、人力で操作している感じは無かった。

漁船は、どれも錨いかりを降ろしていた。舳先はやや大陸側を向いていた。

「俺たちが流されている方向にいる船は、頭に蘇ソウが付く船号なので、江蘇省ジャンスーで許可を得た船

です。もつとも、本物の偽装漁船というのもいて、違法操業している連中はその手のナンバーを拝借するから、本物かどうかはわかりませんが」

「彼らは二四時間ここに？」

「そうですね。最大でも二四時間で交替してます。短いと、一二時間。あの船は、夕方暗くなる前に交替した。暗くなつてしばらくは、投光器に集まってくるイカを釣っていましたよ」

「フィッシュ、兵隊が元気になつたみたいだ！ 円陣を崩して泳ぐぞ。君が後ろから暗視ゴーグルで落伍者を見張ってくれ」

コートニー曹長が命じてきた。

「シールズ隊員が飲んでいるハイドレーション・パックのドリンク、あれ、怪しいですよね……」

劉伍長が水野の隣で囁く。

「同感だ。レシピは秘密だそうだけど、何らかの興奮剤が入っているだろう」

水野らも特製のドリリンクを持ち歩いてしたが、一般的なスポーツ・ドリリンクをさらに濃縮した程度のものだ。

その後、全員が一直線になってシユノーケルで泳ぎはじめた。目指す偽装漁船までは、一五〇〇メートルはある。投光器の光芒こうぼうを避けて少し回り込むので、実際に泳ぐ距離は二〇〇〇メートルほどだろう。決して短い距離ではなかったが、どうにかなった。

船腹に取りつくと、コートニー曹長が細いロープを舷側に投げて引っかける。そして、まるで重力など存在しないかのような身軽さで上つていった。後続は、船上から投げられた漁網ぎよもうを伝う。

行動は、全員が甲板に上がるまで待った。投光器を動かす発動機も回っているため、船上は予想より煩い。そして、やたらと眩しかった。そのせいで、文字通りの灯台もと暗しの状況に陥ってい

た。

「フィッシュ、ちよつと芝居がかつたことを思いついたのですが」と、後部マストの陰で劉伍長が提案してきた。

「船内を制圧したら、シールズの曹長殿に、俺を怒鳴りながら殴るように言ってください。それを船員たちに見せた後に、自分が彼らに『アメリカ人は何をしでかすかわからない。実は洋上でも仲間を見捨てた。些細なことでも発砲するから、今は大人しく従った方がいい』と吹き込みます」

「それ、いいかもね。提案してみよう」

ブリッジには、ほんの三人の乗組員が詰めていただけで、しかも全員がシートの上でうとうとしていた。船室に降りて寝ていた者たちを起こし、船長以下を船室へといったん降ろした。

示し合わせた通り、コートニー曹長は段々と不機嫌に、そして早口で怒鳴りはじめると、狭い階



段の上から劉伍長に殴りかかった。伍長は転げるように船室へと落ち、北京語で何かを言った後、黙り込んだ。

武装漁船の乗組員には、それで十分だった。滅多なことはしない方が安全だと、全員が認識したのだ。

海兵隊員に監視を任せると、コートニー曹長はまずリーダーを覗き込んだ。

「まずは、何をしますか」と水野が聞いた。

「服が欲しいね。アメリカ人のサイズでなくていいから、乾いたTシャツと短パンの一つもあれば助かる。サンダルに、最近では中国人もコーヒーを飲むんじゃないかな。紅茶でもいいが、お茶でも飲んで頭をクールにしよう。飯も欲しいがね。落ち着いたら、船長だけ上がってもらい、いろいろ考えたい。しかしこの投光器があるし、外は何も見えないぞ」

まるでイカ釣り船の漁り火いさびのように明るい。船の外を照らしているはずなのに、ブリッジの中まで明るくしていた。

「君らもシャツを借りた方がいいな。水平線上の軍艦から、望遠で覗いているかもしれない。どの道、夜明けまでは動けない」

「なら、もうその時ですよ」

水野は東の空を指さした。水平線がうっすらと明るさを取り戻しつつある。夜明けが迫っていた。哨戒ヘリに続いて、対潜哨戒機も現れて上空を舞いはじめた。

味方潜水艦が無事脱出してくれることを、今は願うしかなかった。

人民解放軍は、完璧な奇襲作戦でもって南シナ海に浮かぶ東沙島に上陸した。そこは台湾が実効

支配する島で海兵隊が駐留していたが、勝敗は早々と決し、台湾軍海兵隊は島の端の林に逃げ込むしかなかった。

孤立した部隊を救出するために、台湾海軍、自衛隊、そしてアメリカ軍の共同作戦が実行され、兵士のほとんどが島を脱出することができた。

だが彼らの脱出は早々に察知され、解放軍は二隻の潜水艦を必死に追いかけていた。

そこから台湾本土を挟み、尖閣諸島では台湾軍が報復として中国の海警艦五隻を撃沈していた。

さらに上海では、入港寸前の豪華客船でバイオテロが発覚し、船内では疫病が拡大した。

世界は、大戦への階段を着実に上がっていた。

## 第一章 脱出

タイプ055型駆逐艦の一番艦、南昌ナンチャン（一三〇〇〇トン）では、南海艦隊司令官の東暉トシイアオニン、寧海軍大將（上將）と、艦隊参謀長の賀一智海軍少將ホイーチが、出頭した万通大佐ワントシを伴い艦隊情報センターを出て隣の作戦室へと入った。

艦隊情報センターはあまりにも煩く、微妙な会話をするのに適しているとは思えなかった。

ウイングマークをもつ万大佐は、艦内でも飛行服を着ている。艦隊対潜参謀の肩書きを持ち、要するに、この艦隊に接近を試みる敵性国家の潜水艦を狩り、接近を阻止するのが仕事だった。

参謀長が大型モニターを点けると、画面に艦隊

の配置や航空機の情報が表示された。

東提督は、怒ってはいけなさと自分に言い聞かせていた。これは、不可抗力だ。そもそも我が海軍には、潜水艦を狩る能力は無い。少なくとも、昨日まではそうだった。

「……大佐、私だって我が海軍の対潜能力がそれなりの水準にあるなどとは思っていない。だが、これはいくら何でも想定外だ。艦隊のど真ん中に敵の潜水艦が現れたなど」

「はい、提督。こういう状況を想定されていなかったことは、事実です。われわれが事前に想定したのは、艦隊の外周に接近した敵潜水艦がミサイ

ル攻撃を仕掛けてくることでして、そのために対潜網はもっぱら艦隊の外縁部に集中しております。そこを一度突破されたら、探知する術はありませんでした。そもそも、敵潜はいない前提での配置でしたから」

「しかもその変温域を発見したのが、哨戒機ではなく早期警戒機だったというのも、何だかなあ。みっともない話だ」

「おそらくスコールに紛れてエンジンを始動し、バッテリーの充電を目論もくろんだのでしょうか。試しに哨戒ヘリで上空を飛んでみましたが、哨戒ヘリのサーマル・センサーは、その温度差を検知できませんでした」

「参謀長、問題は何だと思う」

「はい。まず、目的です。その目的如何いかんによって、われわれが狩るべき潜水艦は一隻なのか二隻なのかが決まります」

「増援部隊を送り込んだ可能性があるのかと思うか。食料や武器弾薬を密かに陸揚げしたとか？」

「部隊は無いかと。台湾軍の残存兵力にすら、あの林は狭すぎます」

「間もなく夜明けだが、陸兵を出し林を搜索するにはまだ時間がかかる。敵はそこら中にブービー・トラップを仕掛けたはずだから、搜索にはさらに時間もかかるだろう。やはり、これは脱出だ。南北に分かれた部隊が、そのまま脱出した。その場合、一隻ではない。もう一隻は、日本の潜水艦ということではないな？」

「はい、間違いありません。おそらく、リチウムイオン搭載の最新型でしょう。一〇日ほど前ですが、オーストラリア海軍との共同訓練のニュースがこちらで流れました。訓練が終わって帰還途上であれば、この海域に近づく頃です」

万大佐がそう報告した。

「海兵隊兵士全員を脱出させるには、最低二隻が必要だ。だが、どうして誰も気づかなかつたのだ？ 全員を素早く収容するには、浮上するしかない。近くでは漁船だってレーダーを出していた。あれほど大きな司令塔が、レーダーに映らなかつたはずもない。水平線上で警戒しているフリゲイトのレーダーにだって映るだろう」

「謎ですね。陸上からの監視の眼もあつたのに、まさか潜没状態で兵士を収容したとも思えませんし。本当に、脱出はあつたのでしょうか」

「何のために危険を冒してここまで来たのだ？ そして問題は、日本だ。日本が介入した証拠が得られれば、政府は外交的に日本に強く出られるだろう」

「撃沈してよろしいのですか」と、万大佐は怪訝そうな顔で訊いた。

「もちろんだ！ 日本の潜水艦を撃沈できれば、

中国海軍の対潜能力が世界水準に達したことを誇示できる。君は、嫌なのか？」

「いえ。そういうことではなく、そもそも撃沈できる可能性は高くありません。あれは静かで、磁気反応も最小。発見すら至難です」

「では、台湾軍の潜水艦ならば発見できるか」

「可能性は、高いかと。艦齢三〇年を超え、消磁作業もやっているようには思えません。昔ながらの鉛電池で、潜航状態では速度も出ない。ここは、台湾軍潜水艦に的を絞るべきです」

「君は、見つかるかと約束できるかね？」

「残念ながら、確約はできません。提督、我が海軍は今世紀に急拡大しました。この一〇年だけでも空母三隻、駆逐艦三〇隻、フリゲイト二〇隻、コルベット七〇隻もの軍艦を建造した。しかし軍部は、なぜか潜水艦や哨戒機に関しては冷淡です。潜水艦の増勢の計画は始動したものの、まだ緒に

ついたばかり。五〇隻からの潜水艦をもっていることになっていますが、どれも前世紀の旧式艦ばかりで、稼働状態にあるのは僅か。それは海上自衛隊の潜水艦の稼働数にすら及びません。われわれが四発機の対潜哨戒機をモノにしたのはつい最近のことで、その量産ラインが稼働しはじめたのも二〇一五年です。今、稼働状態にある哨戒機をかき集めています。システムも乗員の練度もまだまだです。日米の哨戒機のレベルを大人だとして、われわれはまだ小学生。このタイプ055の駆逐艦が今ここに二〇隻いたとしても、役には立ちません。そもそも、これら駆逐艦は味方潜水艦を相手にした対潜訓練を行ったことは一度もありません。教育訓練の際、潜水艦を探知した時の音紋データを見て、これが潜水艦が発するノイズの波形だ、覚えておけと言われただけで乗り込んでいる。この艦隊で、実際に潜水艦を探知したこ

とのある駆逐艦やフリゲイト、その乗組員はおそらく一隻も、一人もいないはずですよ」

「あっけらかんと言ってくれるものだ。それはわれわれの責任なのか？」

「提督は長年、米海軍を研究なさっていますのでご存じのはず。彼らには対潜哨戒が為されていない海域には空母を入れないし、戦闘機が上空警戒する下では必ず哨戒機が飛んでいる。でもわが国は水上艦の建造にあらゆる資源を注ぎ、対潜哨戒は後回しになった。どこの海軍でも、潜水艦屋や飛行機乗りの発言力は低い。空母機動部隊をもつからには、対潜哨戒能力ありきだということをも、もう少し早く気づいてほしかったとは思いません。……しかし、われわれは結果を出さねばなりません」

万大佐は一步踏み出て、モニターを上から下へと指でなぞった。

「この配置地図は、東沙島を中心に描かれていま  
す。東沙島はご存じのように大陸棚の端にあり、  
非常に浅い海域で、潜水艦が遊弋ゆうよくするには全く不  
向きな深さです。潜水艦活動に適した深度一〇〇  
〇メートルの南シナ海に出るまで、最低でも一〇  
〇キロ。深度四〇〇メートルに脱出するにも五〇  
キロはあります。この駆逐艦ならほんの一時間の  
距離ですが、バッテリーで進む通常動力型潜水艦  
にとっては気が遠くなるような距離です。三ノツ  
トで進んだとしても、一八時間、九時間もそれぞ  
れかかる。五ノット出せたとして、一〇時間と五  
時間です。それも真つ直ぐ進めてのことですが。  
彼らが、東沙島を脱出してから三時間ですが、少  
なくとも台湾の潜水艦はまだこのライン上にいる  
はずです。まだわれわれの勢力圏内において、おそ  
らくは深度一五〇メートル前後の海域を進んでい  
る。間もなく、陽が昇ります。われわれはこの潜

水艦を、まず目視で発見します。天候次第ですが、  
太陽が真上にくる時間となれば、海中もそれなり  
に透けて見えるでしょう」

「潜水艦を、肉眼で探す？　うちの海軍は、まだ  
そのレベルなのか？」

「はい、残念ながら。それに、水上艦も多数動い  
ているので、その雑音の中から潜水艦の推進機音  
を探すというのは、われわれの今の練度では不可  
能です」

「これは、日本の潜水艦も同様なのかね？」

「いいえ。おそらくリチウムイオン電池だと、一  
〇ノットは易々と出せるはずですよ。ひよっとした  
ら二〇ノット出して、今頃はもう深度四〇〇メー  
トルの海域に脱出しているかもしれません。もち  
ろん、そこでも発見できる可能性がゼロというわ  
けではありません。それに、他にも手は打ってあ  
ります。さほど兵士の練度を必要としないシステ

ムを装備した哨戒機を、今呼び寄せているところです。ここ——左上に識別コードが出てきたY-9X哨戒機です。こちらは今、量産中のY-8Qよりいろいろと新しい試みがありますので、役に立つことでしょう」

「どんな試みだね」

提督はその詳細を知りたがった。

「いわゆる、L i D A Rを搭載しています。本来は地上で使うものですが、レーザーで海表面の高さを読みとります。巨大な潜水艦が水面近くを航行すると、排水効果で水面が僅かに盛り上がる。われわれの大陸棚の浅い海では、潜水艦は水面近くを航行するしかないのです、これで日米の潜水艦の接近を拒絶できる。味方の原潜を相手に試験を繰り返したところ、良い成績を収めました。これは、クルーの練度に左右されません。ソフトウエアだけで結果が出る」

「いいではないか。何か問題でもあるのか？」

「はい。原潜は、それなりに大型です。しかし、通常動力潜水艦は小さいし、台湾海軍のものはさらに小型だ。残念ながら、味方の通常動力潜水艦相手では完璧な結果は出せませんでした。いろいろ条件が厳しくなる」

「ああ、理屈はなんとなくわかる。成功すること祈ろう。もし水上艦では探せないとなれば断言するならば、水上艦を海域から遠ざける」

「それをお願いすることになるかもしれませんが、まずは通常の対潜活動での発見に努めます」

「……なるほど。君たちの言い分も了解した。この戦争が片付いたあかつきには、予算と人員の配分に関し、それなりの配慮がなされるよう働きかけよう」

「恐縮です。最善を尽くします」

万大佐としては、方法の如何を問わず、発見す



る自信はそれなりにあった。

だが、機体に乗ったベテランの対潜員をかき集めてはじめて可能になる作戦だ。これらの機体は大陸沿岸部を飛び立ち、まだ向かっている最中だった。

哨戒機など旧式のターボプロップ機で十分だと思っていたが、西側はアメリカ海軍にせよ日本にせよ、哨戒機はターボファン・ジェットに進化した。つまりジェット機だ。

外洋型海軍に脱皮して中東のオイルロードを守ろうとするなら、うちもジェット機の哨戒機を導入せねばなるまいと大佐は考えていた。

昨日までは、願うだけで実現性の無い話だったが、明日からは状況も変わるだろう。

中国海軍のKJ-600（空警-600）早期警戒機は、H-6UD空中給油機から空中給油を

受け、しばらく東沙島西方空域に留まっていた。

東沙島沖の変温水域を発見したのは、彼らだった。正しくは、彼女たちの乗る機体だ。機長一人だけが男性で、他は全員女性兵士で構成されたチームだ。

指揮をとるのも機長ではなく、この機体のデュアル・バンド・レーダーを開発した浩菲ハオフェイ中佐だった。

彼女は今コクピット背後の指揮管制席にいて、胴体下から出たEOセンサーの可視光映像を眺めていた。

水平線上には、太陽が姿を見せようとしていた。そして前方からは、Y-9X哨戒機が接近しつつある。これは彼女たちが発射した人民解放軍寧波ニンポ海軍飛行場で、ともに実験を繰り返している機体だ。

海軍はY-8哨戒機をこのY-9に入れ替えよ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。